

研修目的

耳鼻咽喉科では頸から上の内科的診療から外科的手術まで取り扱う範囲は幅広い。聴覚、嗅覚、味覚、触覚、平衡感覚などの感覚や感覚器を担当することも特徴の一つで、耳鼻咽喉科疾患はこれらの感覚機能障害のほかにも急性炎症や腫瘍、外傷など、扱う疾患は多岐にわたる。この中でも救急疾患を中心に耳鼻咽喉科診療で遭遇する機会の多い疾患に対して治療方針を学び、プライマリケアを修得することが研修の目的である。

習得できるアウトカム（能力）

1) 必ず習得できるアウトカム（能力）

※習得することで診療科の研修を修了できます。習得できていないと評価を受けた場合は、研修期間が延長となります。

A. 医師としての基本的価値観（プロフェッショナリズム）

・耳鼻咽喉科の体系的な疾患に初期対応できる知識、技能、診療態度の習得に努める。

B. 資質・能力

・救急疾患を中心に耳鼻咽喉科診療で遭遇する機会の多い疾患に対して治療方針を学び、プライマリケアを修得すること

C. 基本的診療業務

- ・1. 耳鼻咽喉科の器具やファイバースコープを用いて鼓膜、鼻腔、咽頭、喉頭の観察ができる。
- ・2. 耳鼻咽喉科領域の代表的疾患について、聴力検査、平衡機能検査などの機能検査およびCT、MRIなどの画像検査の評価ができる。
- ・3. 鼻出血、めまい、扁桃炎など耳鼻咽喉科で遭遇する機会の多い急性疾患に対して初期対応を行い、専門医への適切なコンサルテーションができる。

2) 研修医の意向により習得できるアウトカム（能力）

A. 医師としての基本的価値観（プロフェッショナリズム）

・臨床能力・コミュニケーションスキル・倫理的・法的理解の土台の上に立つ、卓越性・人間性・説明責任・利他主義の4つの柱に医療現場を通して皮膚感覚で身に着けるように指導する。

B. 資質・能力

・救急疾患を中心に耳鼻咽喉科診療で遭遇する機会の多い疾患に対して治療方針を学び、プライマリケアを修得する資質と能力を獲得できるように指導する。

C. 基本的診療業務

- ・1. 突発性難聴、顔面神経麻痺のステロイド治療：10～20 例
- ・2. めまいの診断、治療：5～10 例
- ・3. 鼻出血の診断、治療：1～5 例
- ・4. 鼻骨骨折・顔面外傷の診断、治療：1～5 例
- ・5. 急性中耳炎の診断、治療：1～5 例
- ・6. 急性扁桃炎の診断、治療：5～10 例
- ・7. 嚥下障害の嚥下機能検査：1～5 例
- ・8. 扁桃周囲膿瘍の穿刺・切開排膿術：2～5 例
- ・9. 扁桃摘出術・アデノイド切除術（助手または術者）：5～10 例

10. 中耳炎手術（助手または術者）：1～5 例
11. 慢性副鼻腔炎手術（助手または術者）：5～10 例
12. 頭頸部腫瘍手術（助手または術者）：5 例

具体的な指導方法・フィードバック方法（研修方略）

指導医のもとで研修を行う。外来診療においては病歴を聴取し、耳、鼻、咽頭、喉頭の観察を行い、必要に応じて検査を行う。臨床所見や検査結果から疾患を鑑別し、治療方針を立てる。病棟診療においては入院患者の診察を行い、疾患ごとの治療方針を学ぶ。手術においては、主に手術助手を担当し、症例により指導医のもとで術者を担当する。

週間予定表

	午前	午後	夕方
月	外来診療 病棟回診	手術	手術症例カンファレンス 病棟回診
火	外来診療 病棟回診		病棟回診
水	外来診療 病棟回診 手術	手術	病棟回診
木	外来診療 病棟回診	嚥下症例カンファレンス	病棟回診
金	外来診療 病棟回診 手術	手術	病棟回診

指導責任者および指導医

指導責任者：太田伸男

指導医：東海林史

〃：鈴木貴博

〃：佐藤輝幸

：野口直哉

〃：山崎宗治

学会発表・論文作成に対する指導体制

耳鼻咽喉科疾患に関する症例報告や慢性副鼻腔炎などの鼻科学、真珠腫などの耳科学、声帯ポリープなどの喉頭科学、唾液腺腫瘍などの頭頸部外科学の病態に関する学会発表や英文論文の報告を指導している。